

## 論文内容の要旨

報告番号		氏名	春田 祥治
Sequential screening to predict symptomatic pulmonary thromboembolism after gynecologic surgery in Nara, Japan 婦人科手術術後の症候性肺血栓塞栓症予防スクリーニングの有用性についての検討			

### 論文内容の要旨

**【背景】**静脈血栓塞栓症(VTE)は婦人科疾患周術期の致命的合併症のひとつとして重要な疾患である。深部静脈血栓症(DVT)の検出において、下肢静脈超音波検査は簡便で再現性がありかつ正確であるため汎用されている。また、血漿D-dimer検査はVTEの早期検出法として確立している。10年以上前から奈良県立医科大学では、婦人科疾患手術症例に対してProgramme for VTE Screening Study at Nara, Japan(PROVEN)と称した、術前血漿D-dimer値測定検査と下肢静脈超音波検査からなる術前VTEのスクリーニングを行ってきた。

**【目的】**PROVENが、術前無症候性DVTと婦人科手術術後における症候性PTE発症を予測するために有効か否かを検討する。

**【対象と方法】**2004年4月1日から2013年12月31日までの間に奈良県立医科大学附属病院産科婦人科外来で婦人科手術適応があると判定された成人女性(20歳以上)を対象とし、術前に血漿D-dimer(DD)値を測定した。超音波検査施行のためのDDのcut-off値を $1.0 \mu\text{g/mL}$ と定め、 $\text{DD} \geq 1.0 \mu\text{g/mL}$ であった症例に対して1週間以内に下肢静脈超音波検査を行い、一方で $\text{DD} < 1.0 \mu\text{g/mL}$ の症例には超音波検査を施行しなかった。術中および術後はすべての患者に対して、本邦における静脈血栓症予防ガイドラインで推奨されているVTE予防を施行した。VTEと診断された症例に対しては、術前から抗凝固薬による治療を行った主要評価項目を、婦人科手術後の症候性PTE発症患者数とした。

**【結果】**1,729例が登録され、悪性疾患795例(46.0%)、良性疾患934例(54.0%)であった。全症例の平均DD値(mean±SD)は $1.7 \pm 3.3 \mu\text{g/mL}$ であった。DDが陽性であった症例は470例(27.2%)で、これらの症例に対して下肢超音波検査を施行し、470例中94例(20.0%)すなわち、全登録症例1,729例中94例(5.4%)の術前無症候性DVT症例が検出された。悪性疾患では795例中65例(8.2%)、良性疾患では934例中29例(3.1%)であった。DVTを認めた94例の平均DD値は $7.8 \pm 12.8 \mu\text{g/mL}$ 、DVTを認めなかった症例(1,635例)は $1.1 \pm 1.8 \mu\text{g/mL}$ で、DVTを認めた症例の方が有意に高値であった( $p < 0.001$ )。1,729例中6例(0.4%)で術後症候性PTEの発症を認めた。このうち2例で、術前にDVTを検出され抗凝固療法を行っていたが、術後PTEが発症した。また4例は、術前DDが陽性で下肢超音波検査を施行され術前DVTを認めなかった症例であった。術前DDがcut-off値未満であった1,259例から症候性PTEの発症はなかった。

**【結論】**術前DD値が高値であることが、婦人科患者における術前無症候性DVTの存在と関連していた。また、術前DDが陰性である場合、術後PTE発症を除外できた。しかしながら、PROVENは、術後症候性PTE発症の予防に対しては有効ではなかった。そのため、更なる研究により、VTEの進展あるいは再発と抗凝固療法の期間決定に影響を与える因子を確立することが必要である。